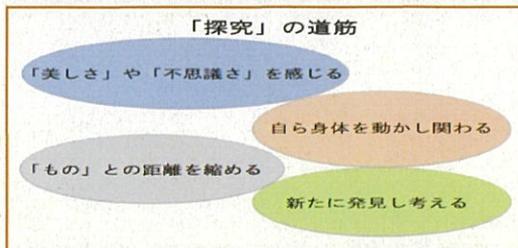


探究する心を育むⅢ ～道具との関わりを手がかりにして～

○灰谷知子 伊集院理子 石川綾子 上坂元絵里 佐藤寛子 杉浦真紀子 高橋陽子 渡辺満美 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

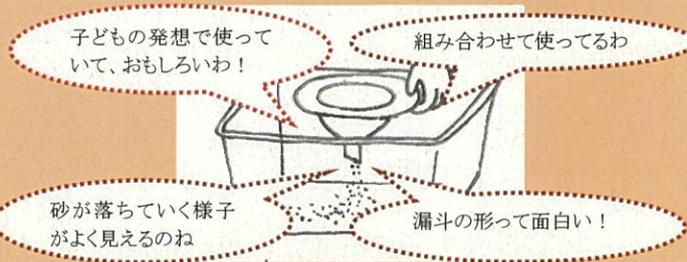
本園では、「探究力・活用力が発揮される生活」というテーマで研究をすすめている。前回の提案では子どもが好んで関わり惹きつけられる「透明」なものに着目し、探究の道筋を明らかにしてきた。

「透明」に続く研究の切り口を探る話し合いの中で、以下のような子どもの姿から話題が広がった。



事例「子どもたちを惹きつけていたものは…」

保育室から出てすぐの三和土に、子どもたちが集まっていた。何をしているのかと思って近づくと、一人の子がアリの入った飼育ケースの中に漏斗を使って砂を足そうとしていた。その周りを子どもたちが囲んで、漏斗の先から砂が落ちていく様子を見たり、「やってみよう」と思った子どもたちが並んで、砂を足していくのを順番にやらせてもらったりしていた。子どもたちを惹きつけていたのは、飼育ケースの中のアリではなく、変わった形をしている道具(漏斗)だった。



変化の過程を見えやすくしたり、変化を促したりする「道具」。道具は探究を誘うのでは？

道具とかがわる子どもたちの姿

道具と子どもたちとのかかわりを丁寧に見ていくところから、子どもが探究を深める過程と、それを育む教師の援助について省察することにした。道具は右記のように定義した。

道具とは・・・
園生活の主体である子ども一人ひとりが遊びの中で思いを実現しようとするときに活用する「もの」
遊びを創り出すときに必要不可欠な「もの」

手に持つ

事例「僕たち消防士」

A児はフルイやシャベルをいくつも抱えて持つ。お気に入りには赤く長いスコップ。「火事です」と言いながら、ずるずると引きずって歩き回る。

考察 子どもたちは、形、色などをきっかけに気に入ったものを見つけ手に持ち、引きずったり押し回したりしてみる。こうした行為を通して、手触り、重さなど身体に伝わる感覚を味わい、安心する。そして、友達と同じ「もの」を持つことで嬉しくなり、気持ちが安定していく。



使ってみる

事例「泡作り」

石鹸を削って遊ぶ子どもたち。どうせ使うなら気持ち良く使えるようにと思い、泡だて器、ネットなど新たな道具を教師は揃えた。早速道具を使って泡作りをする。水と石けんの量、泡立て方で、全く違う質感の泡ができる。

考察 安心して暮らし始めた子どもたちは、様々な「もの」に興味をもち使ってみようとする。教師は、色、形、材質など、より本物に近いものを見極め、子どもたちが使ってみたくなるようにと考える。「もの」を使い始めた子どもたちは、何度も使ってみることで、その「もの」の特徴や用途を身体を通して理解していく。



選んで使う

事例「うつつし絵」

「先生、細い鉛筆ちょうだい」とB児。手にはうつつし紙を持っている。紙が動かないよう力を入れて押さえながら慎重に細い鉛筆で図鑑の鳥の絵をなぞる。

考察 子どもたちは、状況に合わせて「道具」を選ぼうとする。道具を使うことによって引き出される身体の動きや、生み出されるリズムを感じながら、その心地よさを味わい、もっとやってみたくて心を動かす。道具を使い込む中で、「道具」そのものの特徴を見極め、より適したものを選んで使うようになる。





事例「調理道具の整理」

三和土でごっこ遊びをする子どもが近くのボール棚に気づく。そして棚にままごと用の鍋や皿を洗ってふせながら、きれいに分類を始めた。並べ終わると、「ここがお家ね」と確かめ合い、また遊び始めた。

考察 道具を面白く活用することは共に暮らす仲間に伝わり、いいねと認められたり、真似て使い始めたりして、道具を介した関わりが広がる。「道具」の存在が、遊びや生活をより楽しく豊かなものにしていく。

活かして使う

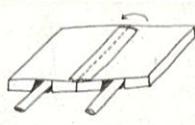


事例「鯛焼き器」

「鯛焼き屋をやる」とC児。教師がイメージを聞くと、「バタンと挟むんだ」と空き箱に棒をつけて作ったものを見せる。C児の発想を受け、教師も材料などのアイデアを出し、鯛焼き屋が始まる。試行錯誤の末、うまく機能し始めた鯛焼き器に惹かれて、売る側にも買う側にも大勢の人が集まってきた。

考察 子どもたちは遊びに必要な道具を自分で作ろうとする。工夫して作った道具は、仲間を引き寄せ、遊びを盛り上げる。うまくいかないもどかしさも味わいながら、教師も一緒に試行錯誤を重ね、本物らしさを追求していく。

つくって使う



ものを手に持ち安心すると、子どもはそれを「道具」として使い始める。使ってみる中で「道具」本来の特徴や用途を身体を通して理解する。そして遊びや生活の必要な場面で自分にあった「道具」を選び、活かすようになり、時には試行錯誤を繰り返して「道具」そのものをつくりだそうとする。

子どもが道具との関わりを深める過程で、より深く考え工夫しようという「探究する心」が育まれていく。

「探究する心」を育むために教師が大切にしたいこと

- ☆ もの本来の用途にかかわらず、子どもの発想でものと柔軟にじっくりかかわることができる体験の保障
- ☆ 特徴を理解し吟味した「もの」を用意し、選びやすく手に取りやすい設えをし、ものや人とのかかわりが豊かに生まれる環境構成の工夫
- ☆ 子どもたち一人ひとりの思いを理解しようと、感覚をとぎすませてかかわる感性